

# 経済理論の客観性（1）

佐藤 順一

## はじめに

この研究ノートは、2016年3月末に定年を迎える私が長年勤務した大東文化大学経済学部へ提出するいわば「卒論」である。卒論といいながら、ここに描かれている思考は現在進行形であるところから、敢えて研究ノートとして提出する。

ただし、文字数の制約から、複数回に分けて掲載されることになる。今回は、第一節「課題と方法」および第二節「客観性」を扱う。次回以降、第三節「三世界図式」、第四節「古典力学」、第五節「基礎的ミクロ経済理論」および第六節「単純なマクロ経済理論」を取り扱う予定である。次回掲載までに時間的余裕があり、原稿にさらに手を入れる機会が与えられているので、予定は変更されるかもしれない。

このような未熟な原稿の掲載を許諾してくださった編集部には深く感謝している。

## 第一節 課題と方法

この研究ノートで、私は、客観性を切り口として、経済理論にみられる構造上の特徴を探究してみたい。しかし、この課題は私には荷が重い。そこで、荷を軽くすることを目的に、私は、論点を絞り込み、単純化して論じることにした。それでもなお、私は困難な課題のすべてを解決できたわけではない。また、取り上げた論点についても、十分に熟成した論考を提出できなかった。そのような意味で、本稿の議論はあくまでも一つの試論にとどまっている。

この節では、私が探究する対象を最初に説明する。次いで、設定されている課題は論理世界の把握であることを示す。さらに、経済理論の論理世界を把握するために、私は客観性を切り口として選択したことを明らかにする。論理世界を浮かび上がらせ、探究するには、探究するやり方を工夫する必要がある。そこで、最後に、本稿で私が採用した工夫を説明する。併せて、この研究ノートの構成を示しておく。

私は当初、マクロ経済理論の論理構造を追究していた。その過程で、ミクロ経済理論と比較することが必要であると考えに至った。その中で、マクロ経済理論にせよミクロ経済理論にせよ、経済理論は科学であるのかどうか、科学であるとしたらそれは如何なる意味で科学なのか、このような疑問が湧いた。この疑問に立ち向かうためには、経済理論が模倣したとされる古典力学を参照せざるをえない。こうして、この研究ノートでは、マクロ経済理論とミクロ経済理論および古典力学を対象とすることになった。

しかし、マクロ経済理論とミクロ経済理論に加えて古典力学を議論の対象とするのでは、あまりにも問題が大きすぎる。そこで、私は、学生が学部で最初に学ぶ経済理論を対象にして推論することにした。その理由は、主に三つに絞ることができる。第一の理由としては、学生が最初に学ぶ理論は、学ぶ者に深い影響を及ぼし、経済学に対する理解の方向性を決定するという事情をあげなければならない。また、一般に理論は単純から複雑にという方向で展開される。それゆえ、最初に学ぶ理論は最も単純であり、私のような浅学なものにも相対的に対処しやすい。この事情が第二の理由である。さらに、理論が展開される過程の出発点に位置する理論には、後に展開される理論が示す特徴の多くが含まれていると期待できる。それゆえ、最初の理論を十分に把握することは、その後に展開される理論の特徴を理解する第一歩となるに違いない。この期待が第三の理由である。

経済学部では、多くの場合、マクロ経済理論とミクロ経済理論の二つのコースが設けられている。本稿で私が検討の対象とするのは、マクロ経済理論のコースで最初に学習する単純なマクロ経済理論とミクロ経済理論のコースで最初に取り扱われるミクロ経済理論を基礎付けているはずだと私が推測する基礎的ミクロ経済理論、この二つの理論である。単純なマクロ経済理論は、企業と家計からなる閉鎖経済を対象とし、45度線モデルとそれを支える諸仮定からなる理論である。これについては、改めて詳述しなくてもよいだろう。

しかし、基礎的ミクロ経済理論については若干の説明が必要であると思われる。学部で最初に学ぶミクロ経済理論は、多くの場合、まずは財の供給と需要の関係で財の価格が決まることを教える。そして、供給の背後には生産者の合理的な行動があり、また需要は消費者の合理的な行動によって決定されることが伝えられる。しかし、素直に見れば、この理論は最終消費財の価格決定理論であるにすぎない。それにもかかわらず、多くの場合当然のように、この理論は、個々の経済主体の合理的な行動が需要と供給の関係を通して財の価格を決定するメカニズムが存在することを教えている、と教えられている。

最終消費財の価格決定理論が財一般の価格決定理論を代表しているのだとする解釈が妥当であるでしょう。言うまでもなく、最終消費財の価格決定理論が科学であるべきであるなら、論理整合的に展開された理論であるだけでは十分ではない。最終消費財の価格決定理論は、単なる思い付きにではなく、科学的で一般的なミクロ経済理論に基礎付けられているのでなければならない。私は、最終消費財の価格決定理論に論理的には先行するこの種の理論を基礎的ミクロ経済理論と名づけることにした。

そうだとすれば、経済理論の構造を把握することを目的とするこの研究ノートで私が取り上げるべきは、最終消費財の価格決定理論ではなく、基礎的ミクロ経済理論であるだろう。しかし、少なくとも学部のミクロ経済理論のコースでは、定式化された基礎的ミクロ経済理論が明示されることはない。そのような意味では、基礎的ミクロ経済理論は存在していない。存在していない基礎的ミクロ経済理論が存在しているかのようにみなす理由とそれを扱う方法については、第五節で説明する。

基礎的ミクロ経済理論は全ての財の価格が需要と供給の関係で決まると定式化する。しかし、

言うまでもなく、その先は、経済主体の私的利益を追求する合理的な行動を背景にもつ価格決定メカニズムが経済全体の資源配分と所得分配を律することを論証する道に繋がっている。基礎的ミクロ経済理論も、単純なマクロ経済理論と同様に、経済全体を見据えている。

この点に着目して、単純なマクロ経済理論を基礎的ミクロ経済理論に接合しようとする努力が重ねられてきた。しかし、両者を接合する努力は失敗に終わったように私は思う。両者ともに、経済全体を視野におき、しかも大きく言えば経済主体の合理的行動を前提として論理整合的に論理を組み立てている。それにもかかわらず接合に失敗した理由は、両者が異なった論理構造をとっていることにあるのではないか。そして、論理構造が異なるとすれば、その原因は理論の対象を扱う方法が相違していることに求められるのではないか。私はこのように判断している。

対象が異なることは、論理展開の中に登場する要素に違いが生じることを意味している。仮に登場する要素が同じになっても、対象の扱いが異なれば、要素間の関係を組み立てる仕方は相違することになる。要素間の組み立てが異なれば、要素間の関係によって生み出される現象が推移していく時間を扱う仕方も違ったものになるに違いない。私は、論理を構成する要素の関係全体を論理空間と名づけ、論理展開の中で扱われる時間を論理時間と呼ぶことにした。そして、論理空間と論理時間が重なす全体には論理世界という名称を付けている。

この用語法に従って、改めてこの研究ノートの課題を定式化しておけば、単純なマクロ経済理論と基礎的ミクロ経済理論の論理世界を把握し、その異同を確認すること、このようになるだろう。この研究ノートでは、第五節で基礎的ミクロ経済理論の論理世界を、第六節では単純なマクロ経済理論の論理世界を、両者の相違を強く意識しながら、探究していく。

単純なマクロ経済理論や基礎的ミクロ経済理論が科学であるとするならば、科学と呼ばれるために必要ないくつかの要件を同時に満たしていなければならない。私の判断では、科学の要件としては、論理整合性、客観性、普遍性および現実妥当性の4点を挙げることができる。このそれぞれについてさまざまな議論が可能であるだろう。また、どの要件に注目するかによって、見えてくる状況は異なってくるはずである。

私は、この研究ノートでは、客観性を切り口にして論理世界を探究していくことにする。確かに、客観性を巡ってはさまざまな定義が存在しうる。また、客観性に関しては、多様な論点があり、それぞれの論点についていろいろな見解が提示されていることも事実である。これらの議論は、相互に関連がないわけではないこともあって、錯綜したものとなるに違いない。錯綜した議論は時に混乱をもたらす。第二節では、この混乱から私の作業を救うことを目的の一つとして、私の課題を達成するのに必要と思われる範囲で、客観性を巡る私の見解を説明しておく。

私の用語法では、客観性は、思考者の思考や思惑とは独立に存在している状態を指している。従って、理論は、人間の思考結果であるのだから、客観的ではありえない。それにもかからず客観的理論という言い方がなされるとすれば、それは理論の対象が客観的であることにほかならない。これが私の判断である。理論の対象が客観的であることは、思考過程の最初から既に理論の対象が与えられていることを意味している。

「客観的对象が与えられている」という文章は受動態の文章である。誰が誰に対して与えたの

かという点が明確になってこそ、能動態の文章が完成し、事態が明瞭に把握できる。この節の残りの部分では、この二つの問いに対する私の解答を示しておく。

論理の厳密性を重んじる立場に立てば、受動態の文章に隠されている主語を捜し求める心理が働くのは当然であるだろう。しかし、誰が対象を与えたのかという問いは神の存在と結びついた議論を誘発しかねない。私は神学論争に巻き込まれたくない。そこで、私は日常生活を持ち出すことにした。「誰が」という主語をではなく、「どこで」という場を問うのである。

私の思考枠組みに従えば、理論の対象は日常生活の中で与えられる。思考者は与えられた対象を日常生活の中から掬い取り、分析する。日常生活および日常生活から掬い取られた対象とその対象を分析する場は、それぞれ異なった特質をもつ像として形成される。私はこの枠組みを仮に三世界図式と名づけ、第三節で説明することにした。

それでは、対象は誰に与えられるのであろうか。二番目のこの問いに対しては、理論構築者に与えられる、と私は解答しておく。理論構築者については独立の節を設けていないので、必要な範囲内で、やや詳しくこの節で説明しておく。

理論構築者の想定については、予め、二点ほど断る必要があるだろう。第一に、私が想定する理論構築者は歴史的に実在した理論構築者ではない。私は、理論の歴史的出発点を検討し、理論が定式化されるに至る歴史的経緯を追跡するつもりはない。私は、経済学史の方法によってではなく、論理的な仕組みを解き明かすことによって、論理世界を把握したいのである。理論構築者の想定は、そのために設定された方法上の工夫である。

第二に、私自身は純然たる理論構築者として振舞うつもりはない。私は、基本的には、理論構築者の作業を観察する立場に身を置きたいのである。たとえ完成した理論の構造を把握するにあたって、それを出来合いの対象として目の前に据えるのではなく、ゼロから組み立てられる過程を見据えてみるべきだと、私は考えている。いわば、完成品を一旦分解し、再度組み立て直すことで、その完成品がもつ可能性と限界を見極める作業を行う、とっていいのかもしれない。

実は、最終消費財の価格決定理論をこのような視点から見ることで、基礎的ミクロ経済理論の必要性も浮かび上がってきた。最終消費財の価格決定理論を基礎付けるはずの基礎的ミクロ経済理論は未完成である。少なくとも最終消費財の価格決定理論が論理的に説明される前に展開されてはいない。それゆえ、基礎的ミクロ経済理論の構造を解析する前に、基礎的ミクロ経済理論を明確に定式化する必要がある。

従って、私は、基礎的ミクロ経済理論については理論構築者として振舞わざるをえない。しかも、他方では、理論構築者の作業を観察する視点でその作業を見つめなければならない。理論構築作業を実行し、同時にその作業を観察する。この二重の作業は、私を当事者であり同時に観察者であるという困難に突き落とすことになる。そこで、基礎的ミクロ経済理論の論理構造を把握するにあたっては、私は理論構築者の作業を想像し、想像したありさまを観察する立場をとりたいと思う。そうすることで、完成されたと目される単純なマクロ経済理論の論理構造を把握するときと同じ立場に近づくことができるだろうと期待している。

理論構築者を想定することは、理論が存在しない状況から議論を始めることを意味する。ゼロ

からの出発というわけである。もちろん、実際には理論は存在し、私もその影響を受けている。それゆえ、ゼロから出発するにあたっては、現実の世界で理論が及ぼしている影響を排除しなければならない。とはいえ、体に染み込んだ匂いは本人には気付かれないものである。この点について十分に自覚したうえで作業を行うほかはないだろう。

もちろん、歴史的現実としては、理論構築者は複数存在し、しかもそれぞれが異なる問題意識を抱いている場合もある。従って、理論構築の作業結果として定式化された理論も多様なバリエーションを示す可能性がある。しかし、学部で最初に学ぶ経済理論は制度化されており、教える者も学ぶ者も共通の認識の下に置かれていると考えてよいだろう。制度化された理論の論理世界を論理的に解析する場合には、ただ一人の理論構築者が確定した問題意識に従って理論を定式化するものと想定することは許されるであろう。

私がなすべきことは、理論構築者の思考を想像することを通して、理論構築者が理論を構築する作業を行う現場に立会うことである。その場合、唯一の理論構築者を想定することで、理論の対象と理論の下敷きになる問題意識および論理の整合的な組み立て、これら三つの要素を相対的に切り離して把握することが容易になる。私は客観性を切り口として経済理論の論理世界を探究することに関心があり、しかも理論の客観性は対象の客観性に集約されるのだから、私はこの三要素のうち対象に着目することにした。

私の議論は、私が想定した理論構築者が客観的に与えられた対象を日常生活の中で受け止めることから始まる。理論構築者は、受動的に与えられた客観的对象と能動的な理論構築作業との間にある種の緊張関係を自覚しながら、理論構築作業を推し進める。次節では、この点をも考慮に入れて、客観性について説明する。

理論構築作業の結果作り出される理論の論理世界は理論分野によって異なっている。この相違は、日常生活の中で対象が与えられる、その与えられ方が異なることによってもたらされる。この点は次節でさらに説明する。対象の与えられ方の相違は、理論構築者が日常生活を送る中で形成される世界と理論の対象から形成される世界および直接に分析の対象として形成される世界、この三つの世界の関係に相違をもたらす。第三節では、三つの世界の一般的な関係について私の考え方を提示する。

対象の与えられ方の相違が論理世界の違いを生み出すことを強く意識して、第四節では、経済理論に対する参照軸として古典力学の論理世界を取り上げる。さらに第五節では、マイクロ経済理論の論理世界は古典力学とは違った論理世界を作り上げていることを明らかにし、第六節では、マクロ経済理論の論理世界はマイクロ経済理論の論理世界とは異なっていることを説明する。

## 第二節 客観性

この研究ノートで私が解明したいのは、古典力学および基礎的マイクロ経済理論と単純なマクロ経済理論それぞれの論理世界における特徴である。私の判断では、これら三分野の論理世界は異なった構造をとっている。それにもかかわらず、これら三分野はともに科学であることを自認している。また、その認識は正当であると多くの人が認めているようでもある。とすれば、この研

究ノートの課題は、古典力学および基礎的ミクロ経済理論と単純なマクロ経済理論それぞれの理論は、論理世界の相違にもかかわらず等しく科学である、と認めることは正当であることを確認する、そういう課題となるのかもしれない。

言うまでもなく、科学であるために満たされるべき要件は複数存在する。論理整合性、普遍性、現実性および客観性などがその例として挙げられるだろう。しかし、当然ながら、科学の要件を表すこれらの言葉に関しては、多様な定義とさまざまな論点が相互に絡まり、錯綜した議論が引き起こされている。しかも、私の関心は科学論一般にはない。私の課題は、科学とのかかわり而言えば、直接には、経済理論が科学であることを確認することにすぎない。

そこで、私の能力をも考慮に入れて、科学の要件を巡る錯綜した議論をできるだけ回避したい。この目的もあって、私は、科学が満たすべき諸要件の中から一つを選び出し、その要件を切り口として、古典力学および基礎的ミクロ経済理論と単純なマクロ経済理論それぞれの論理世界を探究することにした。私が選択した切り口は客観性である。それでもなお、議論は複雑な問題に直面することになるに違いない。この節では、客観性を巡る複雑な問題には、必要な範囲で、しかも時には未熟なまま、触れるにとどまる。

私は科学の構造を複数の論理世界という視点から解き明かそうとしている。もちろん、複数の論理世界という認識はいまだ証明されていない仮説であるにすぎない。それにもかかわらず、私は、このような形で問題を立てる意義などには何ら触れていない。また、私は客観性の問題を過度に単純化し、取り上げるべき主要な論点の多くを論じようともしていない。このような私の姿勢に対する批判は、もちろん存在するだろう。しかし、錯綜した議論や複雑な問題に巻き込まれることを可能な限り回避するためにも、私はその種の批判には反論しないことにした。

この節では四点を説明する。最初に、私が客観性という言葉は思考者の思考とは独立に存在するという意味で使用していること、さらに客観の対象は理論構築者には与えられたものとして現れること、この二点を説明する。第二に、客観性を切り口として見えてくると私が期待していることは、与えられた対象の与えられ方が理論を支える論理上の基盤となり、この基盤と理論との間には構造的な論理的関係が存在すること、以上の点を明らかにする。私の論理世界は、対象の与えられ方と与えられた対象が理論を支えるあり方および理論それ自体の構造、この三つの要素によって特徴づけられる。この点は第三節で再び取り上げる予定にしている。

第三に、対象の扱い方および議論を進める上で設けられる仮定を提示しておく。論理世界を解明するにあたっては、与えられた対象が自然現象であるか、社会現象であるかといった現象の内容にではなく、対象の与えられ方に着目していくことをまずは明らかにする。この節の最後に、対象の与えられ方が論理世界を生み出していく様相に議論の焦点を絞るために私が採用した仮定を示しておく。私は、唯一の理論構築者が特定の問題関心に基づいて論理整合的に理論を構築すると仮定している。さらに、この仮定の含意についても述べておく。

客観性という言葉には多様な定義を与えることができるだろう。私は、ある意味では最も素直に、思考者の思考とは独立に存在する性質という意味で客観性という言葉を用いておきたい。ここでいう思考者は思考主体としての人間一般を指す言葉であり、理論構築者はもちろん、理論構

築者が構築した理論を受け止める者をも含む。従って、留意すべき思考の内容もかなり広い範囲にわたる。概念の創出や操作はもとより、推量や推測に加えて、思考者が思考する方向に影響を与える問題関心を基礎付ける認識なども含む言葉として、私は思考という言葉を使っている。また、独立性とは、思考対象とされようがされまいが対象が存在していることである。あるいは、思考の対象とされる場合には、思考者の思考内容が如何なるものであれ、思考内容とは無関係に思考対象が存在している、という意味である。

このような用語法に従えば、客観的理論あるいは理論の客観性という言葉は矛盾したもの聞こえる。理論は、理論構築者が構築した作品であり、理論構築者が思考した結果生み出された産物にほかならない。したがって、理論は客観的ではありえないように見える。それにもかかわらず、ある論考が科学的理論であると認められるためには、その論考は客観的でなければならないとみなされている。

実際に、理論構築者は自らの問題関心に沿って構築したにもかかわらず、自らが構築した理論は科学的であり、従って科学が満たすべき要件の一つである客観性を満たしていると主張するであろう。構築された理論の受け手もこの主張には同意しているようである。では、両者の判断を正当化する根拠は何だろうか。この問題を解く鍵は理論構築の現場にあるに違いない。

理論構築者は自らの問題関心に従って特定の事象を対象として論理整合的な理論を構築しようとする。ここには、対象と問題関心と論理整合性という3つの要素が登場する。この3つの要素の中で、何が理論の客観性を保証するのだろうか。錯綜した議論を回避するために、ここでは直感的な言い方でこの問題に関する私の判断を示しておく。

第一に、ある論考が論理整合的であるからといって、その論考が客観的理論であるとは限らない。客観的に存在するわけではない対象に基づかずに設定された概念に基づいて整合的に論理を展開することは不可能ではないからである。第二に、理論構築者がその問題関心の下で理論を構築する作業自体は、私の用語法に従えば、客観性を保障するものではありえない。問題関心は理論構築者の特定の認識に基づいて形成されるのであるから、その問題関心に基づいて実行される理論構築作業は思考者の思念の下に置かれていると判断することができる。

しかし、第三に、ある特定の問題関心から理論の対象として選択された特定の事象が理論構築者の思考とは独立に存在するという意味で客観的であるならば、その理論を客観的理論と評価することは許されると思う。この判断に従って、私は、この研究ノートでは、客観性を切り口として論理世界を探究するにあたっては、特に理論の対象に焦点を当てることにする。

私の用語法では、理論の客観性はその理論が対象とする事象が理論構築者の思考とは独立に存在していることを意味している。理論の対象は、理論構築者の問題関心とも、理論を構築する過程における概念の操作とも、さらには構築された理論の帰結とも独立に存在している。理論の対象は、理論構築の過程で生み出されるものではなく、構築された理論の結果として作り出されるのでもない。理論が構築される以前に理論の対象が思考の外部に既にして存在しているのである。理論構築者にとっては、理論の対象は理論構築作業をおこなう前提として理論構築作業の外部から与えられたものとして現れる。対象がもつこの性質を私は対象の所与性と呼ぶことにす

る。単純化して言えば、理論の客観性は対象の所与性に集約される。

なぜ私は客観性を切り口とし、とりわけ対象の所与性に焦点を絞りで、理論の構造を把握しようとしているのか。これが本節で扱う第二の問題である。切り口が異なれば、理論は違った見え方をする。当然、理論構築の現場を構成する三つの要素の何れを切り口としても、理論はそれぞれ異なって見えてくる。そこで、論理整合性と問題関心を切り口とする場合と対比しながら、対象の所与性を切り口とする私の視点からは理論がどのように見えてくる可能性があるのかを検討しておきたい。

論理整合性を切り口として理論構造を探究する場合には、設定された概念が相互に無矛盾であるかどうか、概念の展開が設定された概念と矛盾しないかどうか、これらの点が争点となるのだろう。理論内部の構造が、それ自体で完結した無矛盾な体系であるかどうかを検討されるのである。その結果として理論が完全に論理整合的であることが判明すれば、その理論は自律的な論理体系と評価される。その理論には外部が存在しないかのように見える。そのような意味で、自律的理論はあたかも一個の宇宙であるかのごとくである。しかも、自律的な論理体系として現れる理論は、歴史上のいつの時点でも、どの場所でも、成立するかのように扱われる。

他方、理論構築者の問題関心に着目するときには、理論と問題関心との関係に目が向けられる。社会科学について考察する場合には、この視点は不可欠ですらある。この視点から問われる論点は、理論を構成する概念が理論構築者が抱く問題関心に相応しいかどうか、概念の展開は理論構築者が関心を抱いている問題の解明に有効な手段を提供するかどうか、さらにその手段が現実の世界に思わぬ副作用をもたらすことはないのかどうか、これらの諸点となる。

このとき、理論そのものは自律的で閉じた体系であるとしても、理論は問題関心を通してその外部の歴史上の現実とつながっているものとして把握される。しかも、問題関心は、多くの場合に特定の歴史的状況に基づく特定の問題関心であるのだから、理論とその外部との関係は特定の歴史的現実を踏まえた関係となる。歴史が推移し、現実が変化すれば、問題関心も変わってくる。すると、理論そのものには変化がなくても、歴史の変化に対応して理論とその外部との関係は以前とは異なったものとなる。

このように考えてみれば、理論がどのように見えてくるかを考察するにあたっては、二つの軸を設定することができそうである。言葉の厳密な意味を無視して言えば、論理性と歴史性という軸および理論の外部が存在するか存在しないかという軸、この二つの軸である。論理整合性を切り口とする場合には、外部不在の下で理論内部の論理性が問われる。一方、問題関心の視点から見えてくるのは、理論とその外部との関係が歴史性に彩られている状況である。これに対して、対象の所与性に焦点を合わせる場合には、理論とその外部との関係を論理性という視点で評価していくことになる。

理論の対象が客観的であるときは、理論構築者には対象は外部から与えられたものとして現れる。このとき、理論構築者に対して理論の対象を与える外部を理論構築者は自覚することになる。少なくとも、理論構築者は外部の存在を示唆されることになる。理論構築者にとっては、理論は宇宙ではなく、外部が存在する世界のはずなのである。しかも、理論の対象は客観的な存在



であるのだから、理論構築者にとっては特定の歴史的事実に基づいて理論構築者が抱く問題関心とは無関係なものとして、理論の外部は現れる。

この外部については、歴史の問題としてではなく、論理の問題として扱うべきである。すると、対象の所与性を切り口とすれば、理論とその外部との関係を論理的に検討する手がかりがえられる。少なくとも、私はそのように期待している。さらに言えば、外部から与えられたものとして現れる対象は、それを対象とする理論の論理的な性格や特徴に大きな影響を与え、ときには決定しさえする。この場合、対象が異なれば理論の論理的な性格や特徴も異なるだろう。これが私の作業仮設となる。だからこそ、古典力学と基礎的マイクロ経済理論および単純なマクロ経済理論を個別に検討するのである。

この節の三番目の課題は、この三つの理論の対象をどのように扱うかを明らかにすることである。古典力学の対象は自然現象であり、基礎的マイクロ経済理論と単純なマクロ経済理論の対象は社会現象である。対象のこの相違が自然科学と社会科学の違いを、少なくとも何がしかは説明することは確かであろう。しかし、これだけでは、自然科学も社会科学もともに科学であると評価されていることを説明することはできない。

私の判断では、客観性を切り口とする限り、この三つの理論が等しく科学であると認められるのは、その対象が客観的に与えられた存在であるからである。対象の所与性を共通基盤に設定するのであれば、三つの理論の違いを生み出すものは、対象の内容というより、対象の与えられ方にあると考えるべきであろう。

三つの理論に対する対象の与えられ方は、今の段階では、次のように纏めておくことができる。すなわち、古典力学の対象は感覚的所与であり、基礎的マイクロ経済理論の対象は社会的に所与であり、単純なマクロ経済理論の対象は予感的に所与であると。対象の与えられ方がどのようにして論理世界を生み出すことになるのか、その様相については、古典力学については第四節で、基礎的マイクロ経済理論に関しては第五節で、さらに単純なマクロ経済理論については第六節で、それぞれ説明する。

ところが、理論構築者にとっては、対象は与えられたものであるのだから、対象の与えられ方自体は理論を構築する上での検討対象とはなりにくい。それゆえに、与えられた対象の与えられ方と理論との論理的関係は、多分直接は、視野の内には入ってこない。この論理的関係を探究の対象とすることは、明らかに理論構築作業を上から目線で眺める立場に立つことを意味している

しかし、そのような視点からは、構築された理論の論理世界を十分には理解しきれないのも事実であると、私は考えている。所与性を有する対象と完成された理論との間には、理論構築者が行なう理論構築作業がはさまれている。それゆえ、理論構築者の目線に沿って対象の所与性を考察する必要がある。これが私の立場である。第四節から第六節までの説明では、できる限り理論構築者の目線に沿って事態を把握するように努める。

対象の所与性に焦点を合わせて論理世界を把握するにあたって、私は極端な三つの仮定を設けている。第一に、理論構築者は論理整合的に理論を展開しており、その結果として構築された理論は論理整合的である。この仮定を設けることによって、私は構築された理論の論理整合性に触

れないで済む。ただし、単純なマクロ経済理論の場合は例外である。単純なマクロ経済理論の構築者は、与えられた対象を素材に論理整合的な理論を構築しようとしても、論理整合性を貫き通すことは困難となるように思う。この点については、第六節で検討することになる。

第二の仮定は、理論構築者はただ一人しか存在せず、その理論構築者の問題関心は当該理論分野に唯一存在する問題関心に他ならない、とする仮定である。私は、経済学史の叙述ではなく、完成され定型化された理論の構造を把握することを目指している。従って、この研究ノートで対象とされている各理論がさまざまなバリエーションをもつかもしい可能性を排除しておきたいのである。このことは同時に、問題関心をも議論から事実上排除することを意味する。

第三の仮定は対象の選択に関係する。理論構築者はその問題関心に沿ってさまざまな事象の中から特定の事象を選び出し、理論の対象として設定する。理論構築者が選び出す対象となるさまざまな事象のすべてが客観的存在であるならば、選び出された事象もすべて客観的存在とみなしうる。しかし、選択の対象となる事象のすべてが客観的存在であるというわけではない場合もあるだろう。このときには、理論構築者は客観的事象のみを選択していると仮定しておく。この仮定は、理論の対象となる事象が存在する場とそれらの事象を理論の対象として選択する理論構築者という二つの焦点から構成されている。この関係については、第三節で取り上げることになる。